

# 「自己への配慮」という観点からみた欲望の活用

## How to Utilize Desire from the Point of View of “the Care of the Self”

田淵 義英・芳賀 亜佑美\*

福島工業高等専門学校ビジネスコミュニケーション学科

\* 千葉大学文学部人文学科行動科学コース哲学専修

TABUCHI Yoshihide and HAGA Ayumi\*

National Institute of Technology, Fukushima College, Department of Business Communication

\* Chiba University, Department of Philosophy

(2021年9月6日受理)

In modern Japanese society, it has been said that desire is not worth a use. This paper regards that these views are caused some problems related sexuality, for instance, youth prostitution, the increase of sexual violence and victimization, etc.

This paper argues that the technique to control one’s sexuality or desire in the point of view of “The Care of the Self,” that is the idea of Ancient Greece. Firstly, to discuss a meaning of desire itself, we refer Friedrich Nietzsche’s philosophy and assume that one’s desire is an essential thing. Secondly, to understand the importance of good use of sexuality, this paper examines Michel Foucault’s study in which point out that the manner of sexual activity was problematized from the point of view of “The Care of the Self” by philosophers (and sometime doctors) in classical culture. From Foucault’s study, it should be noted that Parrhesia, that is an activity “to speak candidly” in classical culture, is important for the rules of “The Care of the Self.” Therefore, it is said that we need to be supported others who can guide us into “The Care of the Self.” Thus, in conclusion, it could be argued that we must use sexual desire based on “The Care of the Self” rule to establish one’s ethics.

**Key words:** The Care of the Self, Parrhesia, Desire, Socrates

### 1. はじめに

欲望は自然な衝動でありながら、現代社会では抑圧すべき対象として認識されている。とりわけ性的欲望はそうである。しかしながら、長い人類の歴史において欲望は常に否定的に理解されてきたわけではない。たとえば古代ギリシャでは、欲望は抑圧されるべきものではなく、積極的に統御ないしは活用されることで倫理的な意義を持つものと考えられていた。

本研究は、このような欲望の積極的な意義が失われたことが、性の商品化に伴う欲望の暴走や、性暴力・性被害の増加、援助交際など、現代社会における多様な欲望の問題をもたらしていると捉え、欲望の価値を再評価することを主眼としている。そして最終的には、性倫理が崩壊しつつある現代社会において欲望を適切に統御し、自己の倫理と結びつけて性的欲望を主体的に引き受ける技術を備えるための方法論の確立に向けて、ひとつの方向性を提示する。

本稿の構成は以下のとおりである。2章では、現代社会で欲望、とりわけ性的問題が引き起こされている状況を分析し、根本的な原因を探る。

3章では、身体的欲求と心理的作用が切り離されて議論されている現代社会の教育のあり方を批判し、ニーチェの欲望論に基づいて欲望が人間にとって本質であることを示す。さらに、ミシェル・フーコーによって明らかにされた古代の自己陶冶の実践を参考にしながら、欲望を個人的な倫理の問題として扱うことの意義を主張する。

4章では、いわゆる「自己への配慮」の他者性に言及しつつ、古代のパレーシアの実践を概観する。

5章では、現代社会において性倫理を再構成するためにはパレーシアステースの存在が必要不可欠であることを述べ、パレーシアステースに必要な資格を検討しつつ、性に関する真実が自由に語られうる場所として社会を再構築することの必要性について考察する。

最後に、6章で本研究の結論を述べる。

## 2. 性的欲望の氾濫の時代

### 2.1 性概念の変遷とその問題点

日本社会における性に関する認識は、近年大きな変化を被っているといわれている(矢島 1996:4)。一つは性の解放という方向性である。性コントロールの在り方が大きく変化したのに伴い、社会は性の自由化が進行しているように見える。他方、レイプやセクシュアル・ハラスメント、児童の性的虐待などの社会問題化とともに、性は規制化の方向性も示している(矢島 1996:4)。これらの方向性は、一見するとまったく矛盾しているように見える。しかし、これらはいずれも同一の大きな性の歴史的流れを反映したものである。

ひとつの社会にとって、性をどのように秩序化させるかということは重要な関心事である。矢島によれば、近代社会による性の秩序化は「制度」から「愛」、そして「合意」へと変化してきた(矢島 1996:4)。

婚姻制度に代表される「制度」による性的行為のコントロールは、近代以降の「恋愛」概念の出現によって「制度の無効化」へと、いわば自由化された(矢島 1996:5)。しかし現代社会では、「愛」から「合意」(「相互了解」)へと、さらに性コントロールの在り方が変化がしている(矢島 1996:6)。「合意」は「婚姻前ならびに婚姻外の性関係を『愛』以上に解放させる機能」(矢島 1996:6)を有しており、「遊びであろうが、一夜だけの関係であろうが、とにかくそこに合意が存在すれば、性関係は肯定される」(矢島 1996:6)ようになったのである。

この変化は同時に、まずは愛のない行為への、次いで合意されない行為への徹底した規制化という変化も生み出した。すなわち自由化と規制化は、同じ性コントロールの歴史の表裏をなしているのである。

こうした変化は、社会における性の在り方を大きく変えることになった。まず、性の合法的な商品化(小浜 1990、神山2000)や性労働の正当化(宮 1998:3)、性行動の低年齢化と「ブルセラ」や「援助交際」などの新たな性商品の誕生(矢島 1996:4)などが見られるようになったが、さらに重要な問題として、こうした変化は人々の内面性にも大きな変化をもたらした。たとえば性の商品化は性的関係の非人間化(富田 2013、鈴木 1998)をもたらし、性行動の低年齢化と相まって十分な性倫理の確立を妨げてきた。

以上のように、性概念の自由化と規制化という変化は、性的欲望に対処する技法や倫理の喪失という共通の問題を生み出してきたのである。

### 2.2 性認識の問題点

これらの問題は、社会がこれまで欲望を肯定的に捉えてこなかったことに起因する。なかでもとりわけ重要なことは、教育が欲望を倫理の問題として正面から取り扱うことがなくなったことである。

近代化に伴い、性に関する問題は科学的根拠に基づく身体的欲望としてのみ捉えられるようになった。例えば、性教育では性に関する問題は身体的な方向性から議論されることがほとんどであり、それが心にもたらす心理的作用などの倫理的側面はほとんど性教育から排除されている。教育としての性の言説は、人間の心と身体を切り離して科学的・医学的根拠に基づいた正しい欲望のあり方だけを扱うようになっているのである。

性概念の自由化と規制化の進展にともない性的欲望に対処する技法や倫理が失われている現代社会こそ、性的な欲望についての倫理教育を必要としているはずである。しかし、教育はその役割を十分に果たしているとは言い難い。自身の抱える欲望を前に、他者とのかわりの中で自身の価値や生き方を模索し、他者との理想的な関係を発見していく技術を取り戻すことが、現代社会の大きな課題となっているのである。

したがって本稿では、現代社会で欲望を適切に統御し、自己の倫理と結びつけて性的欲望をコントロールする技術の必要性をあらためて検討し、若年者を導く者としての資格を備えた大人はどのような者がふさわしく、その存在をどう確立していくかについて考察することを目標とする。

## 3. 欲望の意義の検討

### 3.1 ニーチェの欲望論

これまで、性をめぐる問題は欲望が倫理的な問題として問われなくなっている現代の価値観に原因があることを示し、性を倫理の問題として取り戻す必要があることを確認してきた。本章では、フリードリヒ・ニーチェの議論を扱うことで、身体的欲求と心理的作用の不可分性を議論し、欲望を人間の本質的条件として問い直す。

ニーチェはキリスト教道徳を畜群道徳であると批判した哲学者である。キリスト教が次第に権威を失っていくと、西洋社会はやがて「神の死」を経験し、ニヒリズムに直面する。

ニーチェはこの事態を予見し、キリスト教の道徳観によって価値が徹底的に賤しめられた身体に対し、その自然な欲望に耳を傾け、それを軸にして自身の生き方を確立していくことをこそ推奨した(Nietzsche 1924a=1993a)。中山

元によれば、ニーチェは、われわれの身体こそが多様な生のあり方の自覚に繋がり、さらに生の可能性を広げる力を有していると考えた（中村 2013: 29）。つまり、「力への意志」という生そのものへの欲望を人間の尺度にすることによって、欲望それ自体を肯定したのである。

ニーチェの議論をまとめると、キリスト教道徳に代わって人間の根源的・動物的な欲求である「力への意志」を達成していくことこそが善であるということになる。「真の世界」が廃棄されて以降、人間はキリスト教道徳の世界から引きはがされ、生の価値をみずからの手で見出さなければならなくなった。だからこそ、あらゆる「価値や目標は固定した実態ではなく、つねに乗り越えられ、新たに生成」（松田 2004: 127）されるべきもの、言い換えれば主体的な真理を人間が獲得していく力こそが、ニーチェにとっての神の死以降の人間の課題だったのである。

### 3.2 ニーチェの問題点

ニーチェの議論によれば、主体の欲望の価値は、既存の道徳を破壊し、主体がそれを乗り越えていくことで実存的に生きることにその本質がある。つまり、既存の道徳において支配的な価値観を批判的に認識し、それに代わって主体的な欲望を起点として生に強く立ち向かっていくことが重要なのである。

確かにニーチェは、人間にとって欲望が本質的であることを示し、身体的欲求と心理的作用の決定的な結びつきを説明したという点においてはきわめて重要な一歩を踏み出したと言える。しかしその一方で、それらが倫理の問題として議論されていないという点においては批判されなければならない。なぜなら、たとえ人間が欲望を根源的に抱えた存在であり、かつまたそのことが人間が実存として生きるために決定的に重要であるとしても、だからといって無限の欲望に基づく性行為や暴力的な性行為までもが無条件に肯定されるわけではないからだ。すなわち、欲望は、ただ欲望として肯定されるのではなく、倫理の問題として問われねばならないのである。

### 3.3 欲望を「活用する」という観点

実際に欲望と倫理が密接に結びついて展開されていた例として、古代の実践を参考にすることができる。古代の実践において、性的欲望が真理の問題と密接に結びついて問題構成化されていたことを発見したのはミシェル・フーコーであった。例えば、フーコーの著作である『快楽の活用』、『自己への配慮』では、古代ギリシャや古代ローマでの性に関する節制の術は、自己自身の倫理的態度と密接に結びついて問題構成化されていたことが明らかにされている。

フーコーによれば、古代において性的欲望の活用は哲学の重要な関心事であり、それは真理との結びつきにおいて問題構成化されていた。例えば、古代ギリシャではアスケシスという自己陶冶の技術が不可欠であり、この技術を身につけることで欲望から適正な距離を保ち、理性的な備えを身につけることで、真の自由が獲得されるとされていたのである（小林 1998）。古代にみられるこのような恒常的な鍛錬の目的を、フーコーは以下のように説明している。

われわれはまた、良い戦士のように、起こりうる事態に対抗できるようにするものが何であるかを専ら習得しなければならない。それらの事態に狼狽させられないよう、また、事態がわれわれのうちに産み出す感情に流されないよう、習得する必要があるのである。（Foucault 1982b=2001b: 195）

以上のような古代における自己陶冶の技術では、アスケシスという心構えが重視されている。アスケシスは、「訓練によって自己と自己の間に完全な関係を打ち立てるための実践」（廣瀬 2002: 146）と定義され、具体的には欲望に根ざす快楽を適切に配分するため、ロゴスに従って自己を統御し、実践的な「備え」を彼自身のなかに教えこみ、それらをいつでも引き出せるようにしておく技術を示す。加えて、アスケシスで獲得されるべき具体的な「備え」とは、フーコーによれば「〈言説〉——つまり、真なる言説、理に適った言説という意味でのロゴス」（Foucault 1982b=2001b: 195）である。「予期されない事態や不幸が出現したとき、自らを守るために、それらの事態に適切な真なる言説にわれわれは訴えることができるのでなければならない」（Foucault 1982b=2001b: 196）。すなわち、アスケシスによって必要な備えをいつでも引き出せるような心構えを獲得し、「自己にたいする身体的な実践に一定の『形式』を与えることによって、それをひとつの『スタイル』とし、出来事の不意の到来を待ち受けること」（廣瀬 2002: 147）が古代の実践のねらいとして定められていたのである。

他方で、ストア派の教義では、心象に対する間違っただ判断に由来する情念によって人間の苦悩や不幸が生じると考えられ、欲望それ自体が誤謬であるという認識の下で修行が行われていた。

ストア派の教義は主に「無常念」（アタラクシア）の完成のための自己修練を中心として展開される（浅賀 2005: 1）。ストア派の知者とは心象に対する判断に誤りのない者

であり、アタラクシアへの到達のため、自然（神）の意向や御業を理性によって知り、自己を忠実にそれに従えることが真理への接近を可能にすると考えられていた。ストア派によれば、宇宙はロゴスをそなえた生き物であり、宇宙の魂である氣息（プネウマ）＝神が全体に浸透しているのであるから、人間も自分の理性を神的理性の分有として持っていることになる。よって、人間が自らを神的理性に従順に合致させるということは同時に人間自身の本質、人間自身の自然本性（フュシス）への一致の実現を意味する（Riesenhuber 2000: 146）。ストア派はこのようにして理性の働きと禁欲的な修行の相互的な働きかけによってアタラクシアに到達できると考えていたのだ。

このように、古代ギリシアとストア派の実践において共通して見られる特徴は、欲望に対する自身の立場を反省する際に、恒常的に「自己への配慮」という主題に配慮していたという点である。「自己への配慮」とは、まず自身の現状について詳細に知り、そこから進んで「主体が自分の知らない、また自らのうちに住まわっていない真理を、逆に身に帯びること」（Foucault 1982b=2001b: 199）を表わしている。すなわち、古代においては、欲望を適切に活用することで自己を強化していく過程こそが、より善い生に不可欠な要素だったのである。

#### 4. パレーシアと真理の探究

##### 4.1 自己への配慮＝他者への配慮

これまで、古代における欲望を適切に使用するための倫理的な技術は「自己への配慮」という原則に基づいて行われていたことを示してきた。さらに、「自己への配慮」は、ただ単に自分自身を問い、倫理的に構成しなおす作業であるというだけでなく、他者との関係の中ではじめて真に機能する実践であったという点にも着目せねばならない。

古代ギリシアのソクラテスの哲学的探究を記した『ソクラテスの弁明』では、ソクラテスは他者を導く者として描写されている。ここで重要なことは、ソクラテスがこのような営為を行う際に哲学者や道徳家たちに呼びかけたことは、単に自己自身に注意を払って「自己への配慮」を行うだけでなく、自らも他者に勧告する者として、過ちや危険を避け、安全な場所に自らを置くように他者を指導するように促したという点である（Foucault 1982b=2001b: 189）。

古代ギリシア以外にも、この「自己への配慮」と「他者への配慮」が相互作用的に展開されていた例が見出される。例えば、紀元後一・二世紀の師弟関係や友人関係に代表される哲学的実践では、「他者の手助けなしに自己に専心することができない」（Foucault 1982b=2001b: 193）という一

般的な原則が広く強調されていた。これらの記述からは、「自己への配慮」には魂の指導を行う者としての他者の存在が必要不可欠であり、「このような魂の営為において…その営為の支えとなることを可能とする社会的関係の多重性」（Foucault 1982b=2001b: 193）が非常に重視されていた様子が窺える。

すなわち、これまでに述べたように、ソクラテスの哲学においても、セネカやエピクテトス、プルタルコスの実践においても、自分自身に積極的に関与するための他者の必要性が強調されているのであり、他者とのかかわり方も一つの技術として、実践に不可欠な要素であったのである。

##### 4.2 パレーシアの特徴

前述のとおり、「自己への配慮とは、必然的に他者への配慮をとまない、他者によって自己を構成するのではなく、自己への配慮によって他者への配慮を支えようとするような態度を成立させ、個人間の関係の様式さえも編成する」（宇野 2018b: 185）。したがって、自らが他者を支える者としてどのように「ふるまう」べきであるかという課題が、古代ギリシアの権力の行使のための自己陶冶でも、古代ローマの養生生活や複雑な社会構造・婚姻制度に関する道徳的配慮においても第一の問題として立ち現れてくるのである。この「自己への配慮」をめぐる他者の必要性について考察するため、晩期のフーコーは古代ギリシアの「パレーシア」という実践を分析している。

パレーシアは、「『すべてを語ること』、ただし真理を準拠として語ること」（Foucault 2009=2012: 15）であり、真理によって主体を拘束し構成する言表行為を意味する。フレデリック・グロは、パレーシアについて、「立派な生への配慮と、真理の語りという実践との間の相互干渉」（Gros 2002=2009: 86）が正しく機能することでパレーシアとしての実践が成立し、同時に「生の技法、生存の技術、自己の美学としての哲学」（Gros 2002=2009: 86）が開始されると述べる。パレーシアの実践の狙いは、パレーシアステース）が自己を危険にさらしつつ率直に真理を語ることで、語る自己と自己との関係と、自己と他者との関係を、真理を通じて批判的に活性化することであった（新城 2009: 147）。例えば、ソクラテス的パレーシアでは、ソクラテスは対話者に決して答えや真理を外部から提供したりせず、むしろソクラテス自身も真理の探究者として振る舞い、若者や市民との対話を介して自己を変容した。

したがって、知識を単に伝達する現代的教育者とは異なり、パレーシアステースは導く者自身を「自己への配慮」に基づく主体的な哲学的探求へと向かわせようとするのである。



以上のことをまとめると、哲学的探求が真に機能するためにはパレーシアが肝心であり、「パレーシアは、自己を危険にさらしつつ率直に真理を語ることを通じて、語る自己と自己との関係そして自己と他者との関係を真理を通じて批判的に活性化」（新城 2009: 147）されていく必要があった。

#### 4.3 パレーシアステースの振る舞い

「自己への配慮」によって他者の必要性が導かれ、さらにパレーシアという実践において他者が真理の営為に重要な役割を果たすことはこれまでに主張してきたとおりである。

ここで、パレーシアに関する二つの問題が浮上してくる。第一に、パレーシアにおいて必要とされる他者は具体的にどのような素質を備えている必要があったのか、第二に、パレーシアが存在するためには、それを聞き取る他者はどのように振る舞わねばならなかったのか、という問いをめぐって展開される。

まず、第一の問題に関して、フーコーの記述からは、古代文化においてはパレーシアの実践を行う人はどのような人でもあっても良く、したがってパレーシアは職業的な専門家に独占された特権ではなかったということが認められる。

ソクラテスの例では、彼のようにパレーシアの実践を行う資格のある者、すなわち〈真なることを語ること〉を行う者はパレーシアステースと呼ばれていた。フーコーによれば、パレーシアステースはどのような人物であってかまわれないが、「真理を述べる行為のなかで、第一に、語られた真理とそれを語った者の考えとのあいだの根本的な絆が表明されること、〔第二に〕、二人の対話者（真理を語る者とその真理が差し向けられる者）のあいだの絆が危うくされること」（Foucault 2009=2012: 16）が要求される。まず、「パレーシアステースは、自らの意見を差し出し、自分が考えていることを語り、いわば自分が言表する真理に自ら署名し、その真理に自らを縛りつけて、その結果、自らに真理を課し、自らを真理によって拘束」（Foucault 2009=2012: 15-6）せねばならない。パレーシアは「語る主体がおのれ自身との間に結び結ぶ契約」であり、パレーシアステースは「この発話をまさに真理として思考し、尊重し、肯定しなければならない」（廣瀬 2009: 109）のである。

では第二に、パレーシアが存在するための他者の振る舞い、すなわちパレーシアステースの具体的な素質について考察する。

フーコーは、「パレーシアステースが真理を語りつつ自分に提案する役割を演じようとするのであれば」（Foucault

2009=2012: 17）、「その真理を語られる者の方について言えば——最善の決定を下すべく集会を開き審議する民衆であろうと、助言を受けるべき君主、僭主、王であろうと、導かれる友人であろうと——そうした者は（民衆、王、友人は）……その真理を受け入れ」（Foucault 2009=2012: 17）なければならないと述べる。したがって、「パレーシアとは、語る者における真理の勇気、つまりすべてに逆らって自分の考える真理のすべてを語るというリスクを冒す者の勇気であると同時に、自分が耳にする不愉快な真理を真であるとして受け取る対話者の勇気でもある」（Foucault 2009=2012: 18）ということになる。このような配慮があった初めて、パレーシアは存在しうるので。

#### 4.4 パレーシアの複合的側面

しかしながら、古代文化において真理を語る者は、パレーシアステース以外の役職の者たちの中にも見出されていた。例えば、預言者、賢者、教師などは、それぞれ預言、知恵、教養という真理を語る者である。しかし、彼らとパレーシアステースの真理に対する態度は明確に区別されるとフーコーは主張する。

パレーシアステースは、他の誰かの名において謎めいたやり方で運命を明るみに出しつつ真理を語る預言者ではない。パレーシアステースは、自分が望むときに自分に固有の沈黙を背景として知恵の名において存在（エートル）と自然本性（*phusis*）を語る賢者でもない。パレーシアステースは、伝統の名においてテクネーを語る教師、教育者、技量の人でもない。……すなわち、教師のようなやり方で伝統的な絆を強固にするどころか他の人々との争いを開くリスクを冒す限りにおいて、また、他の誰かの名において語る預言者〔とは反対に〕自らの名において明瞭なやり方で〔語る〕限りにおいて、そして最後に、現に存在するものの真理〔を語る限りにおいて〕——事物の存在や自然本性の真理ではなく、諸々の個人や諸々の状況の特異な形式において存在するものの真理を語る限りにおいて——、パレーシアステースは、ギリシア人たちがエートス *êthos* と呼んでいたものについての真なる言説を作用させるのだ、と。（Foucault 2009=2012: 34-5）

ただし、フーコーによれば、それらの役割がいかにはっきりと区別されるものであろうと、「それらが根本的には社会的な登場人物でもなければ社会的役割でもないということ、しっかりと見極めておかなければ」（Foucault 2009=2012: 35）ならない。

先にも述べたように、パレーシアを行うための他者はどのような人であっても構わない。すなわち、パレーシアステータスの資格にこれといった規定はないが、それゆえに、パレーシアステータスの態度からは「四つの真理陳述の様式が、互いに組み合わされ、言説の諸形式、諸々の制度的タイプ、諸々の社会的人物のうちで互いに混ぜ合わされた状態で見いだされることも——非常にしばしば、その逆よりもさらにしばしば——」(Foucault 2009=2012: 34) 起こりうるのだ。

## 5. パレーシア的な言説は行えるか

### 5.1 現代の主体化の問題点

これまでに、パレーシアが機能するためには、絆によって支えられた自己と他者の一対一の関係が批判的に前進する必要があったことを述べた。パレーシアが存在する性関係では、それぞれが真理を目指すという共通の目的を抱えた者として結びつき、互いの関係性が真理によって根拠づけられた。

しかし、現代社会の性に関する言説が生じる場では、他者と語る者は儀礼的な振る舞いによって結びつき、絆に基づく関係を築くことが困難な状況にある。なぜなら、現代社会では、性や欲望に対する認識はその大部分が教育的言説によって取り囲まれているからである。

現代社会では、性に関しては教育的言説が支配的になっており、古代ギリシャ的な真理の語りは行われていない。先述のとおり、倫理的な視点から自身の問題として欲望を問いただす機会そのものがなくなっているのである。教育としての言説は人間の心と身体を分離し、科学的・医学的な正しさに基づいて性的欲望を片付けようとしてきたが、その結果として2章で述べたような様々な倫理的問題を引き起こしている。

フーコーは、近代以降の教育的・体系的な「真理」に関して、「ここで構成され、定義されるのは、おわかりいただけのとおり、パレーシアのある種の実践であり、一人の教師から彼が教育する人々への技術的知の伝達からは今や大きくかけ離れてしまった真理陳述のある種の様式」

(Foucault 2009=2012: 183) と言及する。したがって、欲望や性に関して、自らの経験に基づかず、単に外部から提供された知識によって若者を指導し教育する教師やカウンセラー、医者などの者は力不足である。これまでのフーコーの議論を踏まえるならば、ここで必要とされるのは、いかなるリスクも恐れずに真理を語り、若者を自己の探求に向かわせつつ自らの生も常に批判的に変容し続けるようなパレーシアステータスでなければならない。

### 5.2 指導者の心構え

先にも述べたように、パレーシアステータスは「真理を語ることによって、共通の知、相続、血縁、感謝、友愛といったポジティブな絆を打ち立てるところか、彼は逆に、相手を怒らせたり、敵をつくったり、都市国家の反感を買ったり、悪しき君主ないし僭主による復讐や処罰を引き起こしたりする」(Foucault 2009=2012: 33) リスクを同時に引き受ける者である。

このことは、たとえば、良心の先導の際のパレーシアにおいてははっきりと見られるでしょう。つまり、友愛があって初めて良心の先導は可能となるわけですが、その良心の先導における真理の使用は、まさしく、その真理の弁論を可能にした友愛関係を危いものとし、それを破壊するかもしれないというリスクを冒すものであるということです。(Foucault 2009=2012: 16-7)

上記のフーコーの記述から読み取れるように、パレーシア的に結びついた関係においては、さきだって両者が絆や信頼によって支えられていることが必要条件である。なぜなら、他者を導く者としてのパレーシアステータス自身も、他者との「真なることを語ること」のこの実践によって導かれる必要があるからである。したがって、友愛関係、あるいは師弟関係にもいた関係性の中で、両者は自らも批判される可能性をもった他者として真理を語る義務が発生するのだ。

### 5.3 真なる語りの場

先にも、現代社会で支配的となっているのは欲望に関する教育的言説のみであると指摘したように、パレーシアの実践は今日の社会では姿を消してしまっている。そのような状況において、いかにしてパレーシア的な語りの場を存在させることが出来るだろうか。その条件を考察する前に、まずはパレーシアステータスが存在するための条件についてフーコーのテキストを参考に確認する。

フーコーは、パレーシアが社会に存在するためのいくつかの条件として以下の二点を挙げる。第一に、真理が出現するための場所がしっかり守られ、保証されていること、第二に、真理を聞き取る者の覚悟も前提として確立されていることである(Foucault 2009=2012: 164)。だが、欲望を肯定するような者は社会から排除されてしまう可能性がある今日の社会では、率直に真理を語るパレーシアステータスが常在できるような場はないことは明らかである。

その一方で、パレーシアの特徴の一つである「リスク」としての側面では、自身の行為あるいは相手との関係性な

どによって引き起こされるあらゆる責任を、すべて自己が主体的に引き受ける覚悟をもって真理を語ることが挙げられた。すなわち、真理のためなら自らの命すらも賭けることができる者が真のパレーシアステースであって、この者こそが現代社会の支配的言説に裂け目を作り、新たな倫理的問題として社会での欲望の問われ方を大きく変える可能性がある。

したがって、パレーシアステースは自らが絶命させられるかもしれないリスクを抱えながらも社会に存在しなければならず、その一方で社会の側も、真理を批判的に営むパレーシアステースの存在を許容せねばならない。パレーシアステースは、以上の危険な条件を引き受け、同時に社会もその存在を許容していかなければならないのである。

#### 5.4 パレーシアステースの現代性教育への応用

以上より、性や欲望の認識に関して重要な観点が二点得られる。第一に、性的欲望を倫理的に問題構成化する方法は、どのような真理に依拠して相手との関係性を方向付け、自己を主体化すべきかという点である。

パレーシアによる実践では、欲望の問題は真理への問題へと転化され、欲望の存在が肯定されながら真理への到達が目指される。すなわち、他者との関係性を問うときにはじめて欲望の活用の倫理的問いが開かれるのであり、まず自身を気遣い、次いで相手をより善い生へと導くような態度によって関係を発展させることが重要だ。

第二に、現代の科学的・医学的な欲望の言説を切り崩し、勇気をもって性的欲望の真理を語る者の存在が求められる。なぜなら、欲望に関する醜さや汚さを率直に指摘する語りと、それを正しく活用するための教育的な語りの二重の言説が社会で語られることによって、個人は欲望に真剣に向き合い、倫理的態度の構築という課題と向き合うことができるからである。

したがって、現代社会においてパレーシア的な語りを存在させるためには、まず性や欲望を語る者が、自身の言表と倫理的態度を一致させるように積極的かつ恒常的に配慮する心構えを持つべきだ。この試みは、パレーシアステースという役割を社会の中に新たに存在させるのではなく、既にある社会的役割の者たちにパレーシアの態度を組み込むような形式である。性的欲望に対する適切な技術が態度によって示されることで、非意志的な欲望とより善い自己の確立という倫理的命題とが結び付いて語られることが重要なのである。

## 6. 本研究の結論

### 6.1 今後の展望

本研究では、性倫理が崩壊しつつある現代社会において、欲望を適切に統御し、自己の倫理と結びつけて性的欲望を主体的に引き受ける技術を備えるための方法論の確立に向けた見解を提示した。

3章ではニーチェの議論を援用し、欲望を人間の尺度にすることによって欲望それ自体を肯定するような見方を示した。すなわち、身体的欲求と心理的作用の決定的な結びつきを説明することで、欲望それ自身の価値や意義を主張した。しかし、倫理の問題として欲望が議論されていないという点で彼らの議論は不十分であったため、フーコーが参考としている古代ギリシャや古代ローマ、ストア派などの「自己への配慮」の原則に基づく実践を参照することで、欲望それ自体に価値を置くのではなく、活用の仕方を問うことこそに意義があることを述べた。さらに、4章では「自己への配慮」に基づく実践が機能するための他者の必要性を述べ、真理を語るパレーシアの実践において対話者が真理へと導かれる過程について述べた。ここで、パレーシアの実践の狙いは、パレーシアステースが自己を危険にさらしつつ率直に真理を語ることで、語る自己と自己との関係と、自己と他者との関係を、真理を通じて批判的に活性化することであった。つまり、知識を単に伝達する現代的な教育者とは異なり、パレーシアステースは導く者自身を「自己への配慮」に基づく主体的な哲学的探求へと向かわせようとする者であった。5章では、パレーシアの実践についての理解を深めるため、『アルキビアデス』や『ラケス』の内容を参照しつつ現代社会においてパレーシアステースがいかに関与可能かを検討してきた。

パレーシアが機能するためには、絆によって支えられた自己と他者の一対一の関係が批判的に前進する必要がある。パレーシアが存在する性関係では、それぞれが真理を目指すという共通の目的を抱えた者として結びつき、互いの関係性が真理によって根拠づけられたのであった。

しかし、現代社会の性に関する言説が生じる場では、他者と語る者は儀礼的な振る舞いによって結びつき、絆に基づく関係を築くことが困難な状況にある。性や欲望に関する語りを行う者の例としてカウンセラーや教師、医者などを挙げたが、社会的責任が課されていることによる監視のまなざしの厳しさや、規定のマニュアル通りの行動を要求されることなどの理由から、自分自身の判断によって〈真なることを語ること〉は社会に許容されない傾向にある。したがって今後は、現代の社会関係においてパレーシアステースはどのように存在可能か、あるいはパレーシアの実践はいかんして展開されるのか、その条件が検討されねばならない。

## 6.2 まとめ——『ラケス』より指導者の心構え

最後に、「自己への配慮」に関する倫理的パレーシアの実践は、現代の性教育のように、欲望に対する一般理解から導かれた正しい知識を外部からそのまま与えるのではなく、主体を「自己への配慮」のもとで自己の探求へと開かせるような営みとして機能していた。フーコーが講義で扱った『ラケス』では、倫理的なパレーシアの目的を明確にし、若者を導く者の必要な役目について検討されていく。『ラケス』における生を対象にした真理陳述がカバーしている領域について、フーコーは以下のように述べている。

それは、魂ではなく、人が生きるやり方 (*hontina troponum te zê*, あなたは今をどのように生きており、過去の生をどのように生きたのか) です。生存というこの領域、生存のやり方、生のトポスというこの領域が、ソクラテスの言説とパレーシアが行使される領域を構成することになるのです。したがってそれは、技術的教育におけるような合理性の鎖でもなければ、魂の存在論の様式でもありません。それは、生のスタイルであり、生き方であり、生に与えられる形式そのものなのです。(Foucault 2009=2012: 181-2)

生、生き方が問題とされる『ラケス』のパレーシアでは、語り手の生 (*bios*) とその人物の言説とのあいだに調和があるとき、彼の言説は真理陳述と認められ受け入れられる。これに反して、現代において性的欲望に対して教育的言説を展開する大人たちは、別に自分自身の欲望の扱い方や倫理的態度を示すことによって子どもたちを教えているのではない。しかし、これこそが深刻な問題なのである。

責任ある大人は、子どもを導き、同時に自己自身も問い直すために、既に出来上がったものとしての教育的言説を前提として語るのではいけない。その代わりに、自らの哲学探求の中で獲得した真理をのみ語るで、若者たちに「自己への配慮」の必要性を自覚させることができるはずである。

## 参考文献

浅賀笑, 2005, 「神と人間の関係から見た後期ストア派の自己修練論」『西洋古典研究会論集』14: 1-16.  
Foucault, Michel, 1982, “L’herméneutique du sujet,” *Annuaire du Collège de France, 82e année, Histoire des systèmes de pensée, année 1981-1982*, 395-406. (神崎繁訳, 2001, 「主体の解釈学」『ミシェル・フーコー思考集成IX』筑摩

書房, 186-204. )  
———, 2009, “*Le Courage de la Vérité; Le gouvernement de soi et des autres II*” *Cours au Collège de France, 1983-1984*, Seuil, Gallimard. (慎改康之, 2012, 『真理の勇気 コレージュ・ド・フランス講義 一九八三—一九八四年度』筑摩書房. )  
Gros, Frédéric, 2002, “La parrhêsia chez Foucault (1982-1984),” *Foucault: Le Courage de la vérité*: 155-66. (柵瀬宏平訳, 2009, 「フーコーにおけるパレーシア(1982-1984)」『現代思想』37(7): 82-9. )  
廣瀬浩司, 2002, 「生の形式の発明としての自己主体化——ミシェル・フーコー講義録『主体の解釈学』を読む」『情況 第三期』3(8): 138-57.  
神山進, 2000, 「性の商品化と商品価値——セックスを焦点にして」『彦根論叢』328: 47-68.  
松田央, 2004, 「ヨーロッパのニヒリズム——ニーチェの世界観」『神戸女学院大学論集』51(2): 115-37.  
宮淑子, 1998, 「援助交際が孕む《構図》と《問題点》」『季刊女子教育もんだい』74: 2-6.  
中村哲平, 2013, 「身体のニヒリズム——ニーチェのニヒリズム論で解釈する近代化する身体」『社学研論集』21: 17-32.  
Nietzsche, Friedrich, 1924, *Nietzsches Werke, Taschen-Ausgabe*, Leipzig, Alfred Kröner. (原佑訳, 1993, 『権力への意志上』ちくま書房. )  
Riesenhuber, Klaus, 2000, 『西洋古代・中世哲学史』平凡社.  
清水雄大, 2012, 「言表とエートス——ミシェル・フーコーのパレーシア論について」『言語社会: Gensha』6: 147-63.  
新城邦夫, 2009, 「〈生=セクシュアリティの技法〉の倫理——晩年フーコーの主体化概念の現在化にむけて」『現代思想』37(7): 138-52.  
鈴木水南子, 1998, 「男性はなぜ完春するのか——社会的抑圧が性欲に集約される構造に目を」『季刊女子教育もんだい』74: 14-20.  
富田隆, 2013, 「タントラ・アサーション・スローセックス——性的弁証法による精神的統合と創造」『日本文化研究』10: 91-121.  
宇野邦一, 2018, 「『肉の告白』からアナルケオロジーへ——フーコーの最後の思想(後編)」『群像』73(8): 171-95.  
矢島正見, 1996, 「性倫理の歴史的変遷」『青少年問題』43(9): 4-9.